

小松工高美術部と建築部の生徒7人は26日までに動物の形の木製パズル24組を作り、東日本大震災で被災した宮城県石巻市の園児に贈った。生徒たちは「木のぬくもりを味わいながらパズルで遊び、元気になってもらいたい」と園児を思いやっていた。

被災園児に 木製パズル

パズルは縦13・5センチ、横18センチ。1組12ピースで構成した。美術部員がデザインし、建築部員が形

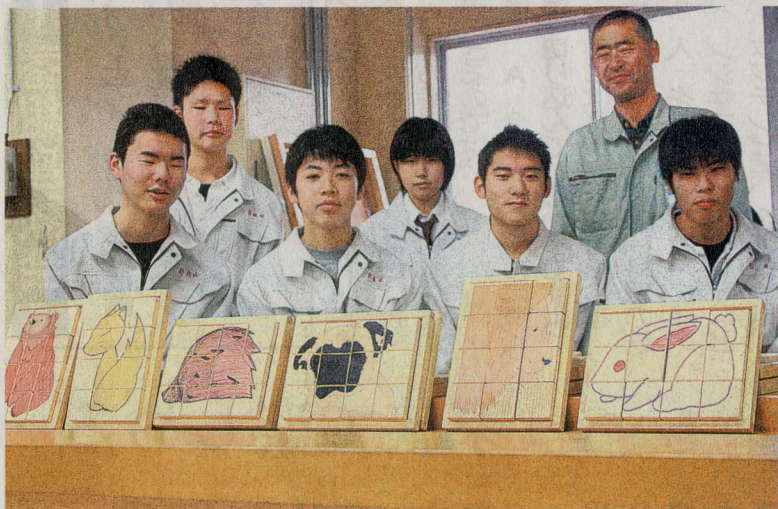
作った。幼児が遊んでもけがをしないように木の角を鋸で削るなど、10月から2カ月かけて丁寧に仕上げた。パズルは石巻市の公立保育所8カ所

小松工高

に3枚ずつ配られる。

東北大研究支援員の成田文代さんは、高校生による震災復興支援プロジェクトを提唱しており、建築部顧問の袖野貴義教諭が趣旨に賛同。美術部員と建築部員に紹介したところ、ぜひ参加したいとの声が上がリ、パズル

美術、建築部員 互いの腕生かし



思いを込めて制作した木製のパズル

—小松工高

制作に乗り出した。

建築部の松本浩輔部長(3年生)は、阪神大震

石巻の保育所に寄贈へ

災が発生した1995年1月17日に生まれ、「たくさんの人が亡くなる一方で、無事この世に生まれた幸せに感謝しなさい」と両親から事あるごとに言い聞かされてきた。「被災した子どもが少しでも元気になってくれたらうれしい」と、部員を励まし、制作に打ち込んだという。

パズルを受け取る窓口となった成田さんは「高校生が時間をつくって、復興支援のために作業してくれたことに感謝したい」と話した。